

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和4年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	伊万里市立東山代小学校
1 前年度 評価結果の概要	・児童が主体的に学習するための授業づくりを具体的目標に掲げ、全職員で共通理解して取り組み、児童の学習意欲を継続させることに力を入れた。児童のアンケートでの算数に対する肯定的回答は80%は超えているものの、前期より低下してしまった。 ・昨年度までの校内研究での取り組みを継続して、支持的風土を基盤にした学級づくりを大切に教育活動を実践し、昨年度より学校が落ち着いた。しかし、キャリア教育については、学年によってボランティアや職業体験活動を仕組むことがあまりできず、児童が将来への夢や希望をもつための学習機会が少なかつた。
2 学校教育目標	故郷を愛し 心豊かに 志を持って生きる児童生徒の育成 ～ かしこく(知) やさしく(徳) たくましく(体) ～
3 本年度の重点目標	①「学力の向上」に重点的に取り組み、児童の学習意欲を向上させ、基礎的・基本的学力の底上げをはかり、活用力を身に付けさせていく。 ②キャリア教育を意識した授業づくりや特別支援教育の充実に取り組み、支持的風土を基盤とした学校づくりを充実させる。

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

(1)共通評価項目			中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
評価項目	重点取組	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価		意見や提言
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上	・教職員間でマイプランを共有するとともに、校内研修等により取り組みの促進を図る。	B	・全国・県学習状況調査結果の分析を通して出た課題を克服するため、各学年毎に応じた授業改善に取り組んだ。また、過去の課題を活用することで傾向と今後指導すべきことを目指すことができた。マイプランの成果指標をもとに、全職員で共通理解して取り組んでいるところである。	B	・全職員で児童の実態をつかむために、学習状況調査の分析を行った。旧高学年でなくても、本校の児童の傾向をつかむことができ、来年度に向けて重点的に取り組むところが見えた。 ・全員が授業研を行い、全員が同じ視点を持って授業改善に取り組んだ。また、「学び合い」を効果的に取り入れることで、自分の考えをしっかりと持たせ、考えをより高めさせたり、児童同士が学び合う中で積極的な説明の定着を図ったりするなどの指導方法の改善を図った。マイプランの成果指標を達成できたと自己申告する教職員は80%以上であった。	B	・家庭での生活習慣の見直しなど、家族からの支援や協力が必要。	・学力向上対策コーディネーター ・研究主任
	○児童全員が主体的に参加するような授業の実践	○アンケートで肯定的な回答をした児童の割合80%以上	・教材研究の充実と発問や問い返しの技術の向上、学び合いを取り入れた授業づくりの工夫を図る。	A	・全学年が校内研で授業研究会を行った。指導案検討や模擬授業、事後検討などを実施することで教師の指導力向上や授業改善に取り組むことができた。	A	・校内研を中心に、お互いに授業を見合うことで発問や児童の活動を効果的に取り入れる方法など、学び合う機会を作ることができた。児童は、自分の考えを書いたり友達に話したりする授業スタイルに慣れ、学び合うことで主体的に学習していく児童が増えた。算数を楽しんでいる児童は79%だった。	A	・家庭で決められた時間に、自分で決めた教科の学習を継続することの大切さを自覚させたい。	・学力向上対策コーディネーター ・研究主任
●心の教育	●特別支援教育や人権同和教育を中核に据え、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○校内や学級での生活アンケートで肯定的な回答をした児童の割合80%以上	・児童の実態把握に関するアンケートの実施 ・特別支援教育についての理解を深める校内研修等の実施 ・人権同和教育や道徳科の授業づくりに関する校内研修等の実施	B	・児童の実態把握のために、月1回程度「心のアンケート」をとり、問題点については対象児童と直接話を聞き、解決できるように努めた。 ・支援学級の児童について学年共通で理解を深める時間を設けたり、紙に提示して意識づけている。 ・平和集会や人権集会では、めあてを明確にして、児童主体で取り組むことができた。暴力的な言動をなくしていくための主体的取り組みを支援していく必要がある。 ・人権月間や人権集会と合わせて、道徳で命の授業に取り組んだ。また、命の授業だけでなく、前後に関連した友情、生き物の命、家族愛、自分の良さ等の授業を行った。	A	・特別支援教育の理解を深めるための研修会を、夏休みに講師を迎えて実施した。年度当初に、配慮を要する児童について共通理解を図る研修会を実施した。 ・1月に道徳ファイルの持ち帰りをし、保護者からのコメントをもつことで、児童を励ます機会をつくることができた。 ・道徳の授業展開として、中心発問を児童と交流する時間を定着させたことで、友だちの考えがさまざまあることに気づいていた。 ・講師招聘による6年生の部落史学習を全職員で参観した。その後人権・同和教育についての基本的な講義をもらい、理解を深めた。	A	・講師を招くなどして、児童の人権意識や思いやりを育てるための取り組みをしっかりと行われていると感じた。	・特別支援教育コーディネーター ・道徳教育推進教師 ・人権・同和教育担当者 ・研究主任 ・各学年主任
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的対応ができていないと回答した教員80%以上	・いじめの認知・覚知に対する対応マニュアルを作成・見直しを行う ・いじめの対応についての研修・会議を年間2回以上行う。 ・生徒指導連絡会を毎週実施する。	A	・いじめにつながる事案が発生したときは、すぐに学年や他の職員にも相談し、お互いの話を聞き取り事実を確認し、保護者にも連絡を取り、指導を行った。たまたまの偶発的な事案に留まらず、いじめの防止や未然防止の観点から、いじめの対応についての研修・会議を年間2回以上行う。 ・生徒指導連絡会を毎週実施する。	A	・各学年ごとの主な年間行事とそれに必要な連絡先をまとめたファイルを作成し、来年度以降活用できるようにした。 ・業務改善委員会から校時表の改正を提案し、他の職員の見解を取り入れながら検討した。来年度から新しい校時表を取り入れていく予定。 ・毎週、生徒指導連絡会を実施し、情報共有することができた。 ・連絡会では、児童のプラス面に着目して共通理解を図ることができた。 ・生徒指導連絡会を発行し、職員間で生徒指導に関する情報を共有することができた。	A	・以前と比べ、学校内の理不尽な量量力等が少なくなり、雰囲気は少し良くなっているのではないかと感じる。 ・保護者の意見をよく聞き、いじめの発見、対応をよくされている。	・生徒指導担当 ・各学年主任
●健康・体づくり	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●「健康に食事は大切である」と考える児童生徒80%以上	・給食便りと学校便り、学級通信で朝食の重要性について連携した情報発信の実施 ・給食指導の時間や教科、学級活動での児童への指導の充実 ・保護者対象の試食試食会の開催(それに代わる啓発研修の機会設定)	B	・学級活動で、栄養教諭を招いて食育の学習を行った。赤・黄・緑の食べ物の種類や働きについて学び、給食や家での食事にも意識して食べる様子が見られた。 ・給食の残菜のめあてを定めているが、学年学級によって差がある。 ・赤・黄・緑の食べ物の働き(2、3年生)や、朝ご飯の大切さ(4年生)について担任と協力して食育の授業を行った。毎日の給食に繋がる姿勢や食べ物の働きを考えた給食を食べる姿が見られた。	A	・宇宙プロジェクトのおかげで、自分の将来の夢について真剣に向き合えて考えた。 ・5年生と2年生合同で、地域の方と麦踏み体験を行った。麦の成長や生産者の苦労などがわかり、いつも通るだけの畑に関心を持ったり地域の方と触れ合うことで郷土愛を深めることができた。	A	・健全な精神は食にあり、家族での食事に感謝しているだろうか。 ・栄養教諭と担任の先生が連携しての食育はとて素晴らしいと思う。	・栄養教諭 ・各学年主任
	○安全に関する「資質・能力」の育成	○性に関する指導の授業を、全学級年間1回以上行う。ただし発達段階に応じて回数考慮する。	・「性に関する年間教育計画」に基づき、全学年で性教育を行う。	B	・「下着の役割と体の清潔」について学習を行うなど自分の体を大切にすること、自分の体は自分で守るよう意識づけを図った。 ・体服や水着への着替え等にも配慮し、自分の体を守るための指導を行っている。	B	・保健と授業で、健康な生活と環境についての学習を行ったことで、自分の体を意識した生活を送ることができるようになった。また、LGBTQ理解についてなど、性教育の必要性を進めていく必要がある。 ・生活科の「自分ものがたり」の作成に関連しておへその秘密や赤ちゃんの誕生などを学習したり、家の人にインタビューしたことを自分でアルバムにまとめる学習を通して、生命の尊さや生きる喜びを感じることができた。	B	・社会的な問題にもなっている性教育への取り組みを更に進めてほしい。	・養護教諭 ・各学年主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○職員の仕事アレルギ一等への意識と対応技術の向上	○アレルギ発生事案をゼロにする	・各種アレルギに対する研修会を年間2回実施 ・アレルギ児童への対応マニュアルと薬等の保管場所の共通認識 ・保護者との密接な連携	A	・アレルギ児童の保護者と学校職員との給食の面談を月1回は行い連携を図った。 ・アレルギ児童の保護者と毎月面談を行い、安全に給食が提供できるように努めた。また、新規給食児童の保護者とも連絡をとり、病院受診の案内等連携を図った。	A	・月1回の面談を行うなど、アレルギ対応児童の保護者、担任、養護教諭と連携し、安全に給食が提供することができた。	A	・アレルギへの対応を細かく実施されているので感謝している。	・栄養教諭 ・各学年主任
	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外勤務時間の上限を遵守する。	・定時退勤日の設定 ・業務記録票による自己管理の徹底 ・退勤時刻の事前設定による時間外勤務時間の削減	A	・出勤時に退勤予定時刻をボードに示すことにより、退勤時刻を意識して働くことができるようになった。 ・業務記録票の時間外勤務時間を昨年と比較し減ったことで、意識的に超過勤務を減らすことができた。 ・シフトの導入により、出欠連絡等の電話対応に時間がからなくなった。	A	・業務改善委員会として、それぞれの職員にとって負担になっている業務についてアンケートを取り、改善すべき業務を明らかにすることができた。それらの業務を減らすだけでなく、内容の改善や改革が必要だという業務改善への意識が高まってきた。	A	・先生方の勤務体制を見ていたら、もっと自由にできる時間があればと感じる。	・管理職 ・業務改善委員会
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○聖域のない学校行事や業務の見直しと削減	○働き方改革について組織的対応ができていないと回答した教員80%以上	・業務改善委員会を年2回実施、職員自身による業務改善を図る。	B	・業務改善委員会を各世代から選出し、それぞれに工夫していることを出し合い、今年度から取り組むことを考えることができた。 ・2回目の業務改善委員会では、改革案として校時表の検討をしている。	B	・各学年ごとの主な年間行事とそれに必要な連絡先をまとめたファイルを作成し、来年度以降活用できるようにした。 ・業務改善委員会から校時表の改正を提案し、他の職員の見解を取り入れながら検討した。来年度から新しい校時表を取り入れていく。 ・組織的対応ができているという回答は80%程度であった。地域と連携した更なる改革が必要である。	B	・働き方改革がもっと進むことを祈る。 ・来年度からの校時表変更に向けている。	・管理職 ・業務改善委員会

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目			中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価		意見や提言
○児童の探究心と学習持続力の向上	○指導方法についての全職員の共通理解と共通実践	○佐賀県学習状況調査[12月調査]において無答0、全観点で対比1.0以上	・児童が課題に向かう必然性や日常性を実感できる学習課題づくりの工夫 ・学習意欲の向上と持続を促す形成的評価(言葉かけ)の工夫	B	・過去の問題を活用することで、児童に足りないものや指導法の改善点に気づき学習に生かすことができた。 ・授業研究会を行い、教師の言葉かけや指示の良くなった点を見つけて共有した。多様な指導の在り方に触れることができ、視野を広げることができた。	A	・佐賀県学習状況調査(12月調査)結果では、6年生は前年度と比較して県上(国語・社会・理科)同程度(算数)より、社会では対比1.0ポイント、理科は対比1.0ポイント超えであった。5年生は、昨年と同様、国語、算数とも平均を回っていたが、算数では正答率で11ポイント、到達基準正答率で10ポイント伸びが見られた。4年生は、国語が対比正答率で7ポイント、算数が対比正答率で4ポイント上回る結果となった。児童の自ら学習する(興味関心をもち、自分で考え、解決しようとする)力を引き出すことこれまで全職員で取り組んでいた。その結果が今年に数値として表れているように感じている。 ・日常生活にあり得る場面を問題として扱い、児童の興味関心を持たせた授業展開と工夫することができた。 ・できそうかも、やってみたいと感じさせて学習に臨ませるような声かけ工夫を教師が増えた。また、振り返りを行い、児童自身が自分の成長を感じられるように継続して取り組むことができた。	A	・工夫した授業づくりを心掛けられていることがわかった。	・学力向上対策コーディネーター ・研究主任

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育	<p>・小中連携による学力向上推進2年目として、児童が主体的に学習するための授業づくりを具体的目標に掲げ、学び合いを軸とした授業づくりやAIDRILの効果的な活用など、児童の学習意欲を高めることに力を入れた。教職員のマイプランでの成果目標は80%を超え、児童のアンケートでの算数に対する肯定的回答も80%は超えているものの、苦手意識のある児童があまり減っていないことが課題である。</p> <p>・「心の教育」や「健康・体づくり」については特別支援教育と支持的風土を基盤にした学級づくりを大切に教育活動を実践し、概ねアンケートでの目標を達成した。高学年児童は落ち着いた過ごしことができたが、コロナ禍の影響や家庭環境による精神的な不調のため不登校児童が増えた。また、登校時から落ち着かず、授業中座っておけない低学年児童が増えた。児童や家庭への支援を、SSWやSC、子育て支援課等の児童福祉専門機関と連携し継続していく必要性を強く感じた。</p> <p>・キャリア教育については、県の取組へ参加したり地域協力隊の方や民生委員の方に協力していただいたりするなど、ボランティア活動や児童が将来への夢や希望をもつための学習機会を昨年度より多く設定することができた。</p> <p>・来年度も「学力の向上」に継続して取り組み、AIDRIL等を効果的に活用しながら児童の学習意欲を向上させ、基礎基本をもとにした活用力を身に付けさせていく。また、性教育やキャリア教育を取り入れた授業づくり、特別支援教育の充実に取り組み、保護者や地域と連携してコミュニティスクールとしての強みを生かした学校づくりを充実させていく。</p>
------------------------	--

5 総合評価・次年度への展望